

平成30年6月5日発行(毎月5日1回発行)
第58巻6月号(通巻707号)

風土



6

石川桂郎俳句鑑賞

南 うみを

切山椒 ひとり の 数を 減らし をり

(句集「高蘆」より 昭和四十四年作)

「切山椒」は上新粉に砂糖と山椒の粉を混ぜて搗き、薄く伸ばして拍子切りにした餅菓子で正月に食べます。酉の市の縁起物としても売られています。桂郎師はこの頃、転々としていた発行所をまた七畳小屋に戻っています。家族の家は別にあるのですが、七畳小屋で仕事をすることが多く、それが「ひとりの数を減らしをり」なのです。作家、主宰としての孤独感が表れています。

塗 椀 に 割 つ て 重 し よ 寒 卵

(句集「高蘆」より 昭和四十四年作)

「寒卵」は滋養が高く、貯蔵も利くのでとりわけ好まれます。桂郎師はこの年に肺炎を患っていますので、療養中の作品かもしれません。見舞いの「寒卵」なればこそ、「割つて重しよ」に相手への感謝の念が滲み出ています。また「塗椀」の外側の黒、内側の赤、そして黄身の盛り上がりと色彩も鮮やかです。

白牡丹 そのまま月の牡丹かな

(句集「幻」より 平成六年作)

器師に「いのちふたつ」の指針がありますが、これもそれを深めた作品になっています。ひたすら「白牡丹」と向き合い、その「いのち」との交感の末に、「月の牡丹」を得ました。白々とした月明りの中で神々しいまでに浮く「白牡丹」です。「そのまま」ということばが「白牡丹」との真摯な対峙を伝えていきます。この「月の牡丹」はこの世を突き抜けた世界になっています。

いなびかり沁み入る妻の髪洗ふ

(句集「幻」より 平成六年作)

器師の妻はこの年に倒れ、入院を余儀なくされました。かつて句集「二代の甕」で、「夫婦して覗ける妻に鱗高値」、「大根買ふ無造作の妻おそれけり」と詠んだ最愛の妻です。すでに妻は自分で髪を洗えないほどの状態なのです。癒えることを願いつつ洗う妻の髪が、「いなびかり」に曝されます。雷鳴と「いなびかり」が器師の不安をつのらせるのです。絶唱と言える作品です。

父の鋤

南うみを

花きぶし揺れをり沖のうねりをり

濤音のどおんと椿落ちにけり

若布刈る若狭の波を均しては

若布干す刈りきし磯の風に干す

春風の出で入る網を繕へり

埋 墓 へ 浜 大 根 の 花 の 坂

つばめ来と草起ちあがり水をどり

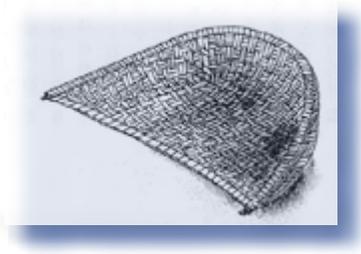
乗つ込みの鮒弾かれて畦に跳ね

父の鍬いまも霞の底を打ち

ひばり揚がる雨をひかりと散らしつつ

雲の子のつぎつぎ湧いて卒業す

花鳥になれずに鳩よ子に追はる



竹間集

同人作品



酒中花

田中佐知子

椿園葉かげに咲きて名は「マリア」
椿園出づ酒中花には逢へず
春昼の田に置き去りの耕耘機
鳥風や蟹の墓山煙立ち
鳥風や塩田跡の乾きぬて
帳尻の合はぬ家計簿鳥雲に
街おぼろ錦市場を通り抜け

西行忌

中村 洋子

春霞の舟べり叩く西行忌
国宝の葵の紋の雛調度
雛壇の箆笥の中を覗きけり
一本のメタセコイアへ青き踏む
校門へ人のトンネル卒業す
ページ繰る指のありけり目借時
たんぽぽの知恵は綿毛となりけり

吊し雛

橋添やよひ

幼子にも自我のありけり山椒の芽
風光る英学校の発祥地
春暖炉かつて師弟は膝を寄せ
裏惚ぶ硯の海や春浅き
冴え返る新島裏の自責の杖
それぞれの遺品にこゑや牡丹の芽
ことごとく揺れるよりなき吊し雛

チューリップ

浅田 光代

春宵のゆるく閉ぢたる鯉の口
初花やさみしき刻を同じうす
ほんたうは恥ずかしがり屋チューリップ
鳥帰る朝市の椅子とりどりに
野仏に花菜供へてまはる役
飯蛸のずるりがすぐに戻さるる
魚店の濁声ひびく桜鯛

不揃ひの和紙

柿沼 盟子

春寒し石をはじくに石蹴つて
沈丁のほぐれ五感の鋭くなりぬ
土手沿ひに病院を出でつくしんぼ
風光る足の運びのぴたり合ひ
ミモザ咲くある日爆発したるかに
ポート屋に新たな幟春の鴨
不揃ひの和紙のぐるりや花曇

春 月

高村 令子

日と風と夢を宿して犬ふぐり
城崖を夢の根城に露の臺
街へ出る遠山霞愛でながら
花吹雪杖の身の杖弾ませて
正解などどうでもよくて桜かな
月朧朽ちたるままの水車小屋
無為徒食して春月を戻りけり

三月来

土井 三乙

家壊す音の止みをり雪降りをり
早春やかならずどこか濡れてゐて
三月来足の踏み場もなき書齋
繰り返す昔の話雪解の夜
雛の間の妻に止まる時間かな
明るしと窓に寄り立つ春の雪
鳥声や開けられてある春障子一

山河集

同人作品



南うみを選

山の声地の声春の水の音
上迂蒼人

地鳴きせる荒田走りの雉子かな
山里を浄土と化せり涅槃雪
つくづくし列はみ出して背伸びせり
葛城山に雨のかかれる芽吹きかな

明るみの空の切れ目や西行忌
下山田美江

春兆す蟹百態の絵皿かな
花曇ケース携へ楽屋入り
えだぶりのままに手摺や鳥雲に
風光る紅絹もて拭ふ螺鈿かな

手話の肘伸びてたんぽぽ摘まれゆく
山田健太

スリッパの音よくひびく春の風邪
温みたる水は満身創痍かな

たんぽぽや土管抜け来し子の笑顔
卒業の四肢伸びてゐる豊かな

陽炎へるなかに一筋荒川線
川田好子

霾や人生百年遠からじ
たもとほる糺の森や西行忌
辛夷咲き村のくまなく動き出す
新しき卒塔婆につもる春の雪

花馬酔木共学となる女学校
高橋まき子

沖に立つ富士の嶺白し若布干す
海岸に砂の高楼俊寛忌
陽光の空は水色蓬摘む
旅立ちや陽炎分けて列車着く

風土独語／南 うみを



卒業の四肢伸びてゐる覺かな

山田 健太

婦省子が畳に人の字になるといふ俳句は見かけますが、これは「卒業」の子です。学校生活の窮屈さから解放され、また受験にも合格した喜びの表れかもしれません。季語の巧みさが光ります。

水音のまつしぐらなる山ざくら

雨宮 桂子

俳句は如何に読み手の想像力を刺激するかが勝負です。ここでは「水音のまつしぐら」で、溪流のゆたかな水の進りを想像します。それを覆うように「山ざくら」が咲き誇っているのです。

蠶や人生百年遠からじ

川田 好子

「蠶」と「人生百年」は直接関係ありません。しかし太古から変わらぬ「蠶」と、医療の進歩による平均寿命の伸びには目を張ります。はたしてそれがいいことなのか。

桐箆筒ぶふーと閉まり臙かな

渡辺 やや

この句「ぶふー」で、上等な滑りのよい桐箆筒を見事に表現しました。まわりを包む「臙」の闇も効果的です。

海岸に砂の高樓俊寛忌

高橋まき子

「俊寛」は平家討伐を謀ったが、捕えられ鬼界局に流されました。その後の赦免でも、「俊寛」だけは許されずそこで没したのです。いずれ波に消える「砂の高樓」は潰えた「俊寛」の夢です。

地鳴させる荒田走りの雉子かな

上辻 蒼人

雉子は蛇をも食うほど強い鳥です。その鳴き声も「ケーン、ケーン」と勇ましく、人に出会っても飛ばず、ひたすら走って逃げます。荒田をまつしぐらに走る雉子の雄々しさを捉えた句です。

ひらひらと花ひらひらと手話の指

落合 絹代

これは飛花落花の中で、手話で会話をする人物を描きました。「ひらひら」と動く指が、花を楽しんでいる様子を伝えています。

春兆す蟹百態の絵皿かな

下山田美江

作者は「春」の兆しを何で感じたか。蟹の絵皿で感じたのです。百態とありますからあらゆる動きを描いているのです。色も多様です。季節への敏感な感性から生まれた句です。

芽柳やひそかにすすむ代替り

赤石 梨花

まず「芽柳」と「代替り」から川辺の酒か醤油の蔵元を想像します。また「ひそかにすすむ」から、つつましやかに生業を継いできた伝統ある蔵元が伝わってきます。味わいのある句です。

風土集



南うみを選

大仏の胎内もまた花ぐもり 大和 落合 絹代

五山一の格にほぐるる牡丹の芽

日の射して目覚めうながす朝ざくら

ひらひらと花ひらひらと手話の指

水辺より丘のふぶけり花浄土

甲州の空に預ける桃の花 横浜

啓蟄の浦の子かごめかごめかな

水温む昭和の日々は抽斗に

芽柳やひそかにすすむ代替り

三千本梅林の香に生くわれら

一片は空にもどりし白すみれ 福生

水音のまつしぐらなる山ざくら

春雪や朱の濃くなる極楽園

春驟雨空の抽斗あけしまま

翁草石置き屋根に雨来る

雨宮 桂子

赤石 梨花

桐箆筥ふふーと閉まり臃かな 宇治 渡辺 やや

野遊びの莫産に昼餉の早々と

天井の竜の眼の追ふ春の蝶

口々に我が家のレシビ蓬摘む

ほつほつとあとは怒濤の芽吹きかな

隣家のシチューの匂ふ菊根分 東京 中嶋 陽子

金色の九谷の皿や鳥の恋

花冷えや絵皿に西行法師の詩

一坪のネイルサロンや花すみれ

目刺焼くパソコン遠隔操作中

廃校の小中学校なごり雪 いわき 佐藤 やすこ

空色の園児の帽子犬ふぐり

銀色の波間の揺らぎ春の海

如月や初めて「ぼく」と言ひし朝

追ひかけて空へ大地へしやぼん玉